

## Comparisons of Posters to Promote Mask Wearing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 清史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00029392">https://doi.org/10.14945/00029392</a>

# パンデミック下でのマスク着用促進ポスターの研究

鈴木 清 史<sup>1</sup>

## はじめに

2020年を迎えてから新型コロナウイルスの感染が世界中に拡大した。3月11日世界保健機構（WHO）は、このウイルスによる感染症の世界的大流行（パンデミック）を宣言した。各国の保健機関は感染拡大阻止のため、個人で対応可能な方策を模索し提唱した。それらの代表的なものは密室（Closed settings）、人混み（Crowded places）、人と人の近接な間隔（Closed contact settings）の回避、手洗いとうがいの励行、そしてマスク着用であった。

最初の3つの要素はさほど時間がかからず3密（3C）と称され、3密（3C）の回避というかけ声のもとで実践されるようになった。手洗いやうがいは一般的な健康管理の手段として以前から認められていたし、新型コロナ感染拡大以前から学校教育の中でも児童を対象に教えられていた。一方、マスク着用は個人で対応可能な予防施策としては世界的には賛否が分かれていた。

第1次世界大戦時に大感染を引き起こした「スペイン風邪」に対処するために欧米でも日本でもマスクの着用が呼びかけられた。しかし、この流行が収まると欧米ではマスクの着用がなされなくなった。

一方、日本ではマスクは日常生活に定着した。季節性インフルエンザの流行前や花粉症の季節になるとマスク着用がもたらす予防効果が多くメディアで取り上げられている。初冬から春にかけてマスクを着用して街を歩いている人びとの姿はいわば季節の風物詩のようになっていく。そのせいか、今回の新型コロナへの予防策としてもマスク着用には大きな抵抗はなかったようである。

ある調査によると〔日本リサーチセンター 2021〕、新型コロナ感染が始まった2020年3月の時点で日本では6割以上の人びとがマスクを着用していた。マスク着用者の割合が高いという類似の傾向は、タイ王国、台湾、香港などのアジアの国や地域の人びとのあいだでも見ることができた。

一方、この時期深刻な影響を受けていた英国、フランス、そして米国などでは人びとのマスク着用率は一桁台であった。新型コロナ感染拡大初期に最も深刻な状況に見舞われ、他のどの国よりも早い段階で国全体の一斉外出禁止令を発していたイタリアでも半数近くがマスク未着用であった。つまり、欧米の国々には、100年以上も前の「スペイン風邪」大流行時には利用されていたマスクは、今回の新型コロナのパンデミックが宣言された当初、それを着用する動きはほとんどなかったのである。

しかし約1年が経過した2021年1月になるとマスク着用率はどの国や地域においても軒並み過半数を超え、場合によっては8割を超える住民がマスクを着用するようになっていた〔日本リサーチセンター 2021〕。こうした変化は直接的には法律を定め、公的な場でのマスク未着用が罰金処罰対象とされたことによってもたらされたと考えられる。同時にマスク着用を促進するためのさまざまな広報が展開され、マスクに対する人びとの認識に変化が生じ、マスク着用の必要性が受容されていったとも言えそうである。どのような広報が展開されたのだろうか。この疑問が本稿のきっかけである。以下では、マスク着用推進広報で登場したポスターを取り上げて国際比較を試みることにする。

## マスクの定義

新型コロナウイルスの感染症（Covid-19）が世界規模で広まって3年が経過しているため今さら「マスクとは何か」をわざわざ定義する必要はないのかもしれない。しかし、用語としての「マスク（mask）」

<sup>1</sup> 防災総合センター・客員教授

は多義で、場面に応じてその意味することが異なる。例えば、甘いマスクといえば顔立ちを指す。デスマスクは死者の顔から形をとって作る死面のことである。日本経済の高度成長期に漫画雑誌で登場した「タイガーマスク」の主人公はトラの頭部顔面を模した布を頭から顎まですっぽりとかぶって、顔を見せないようにしている。この時のマスクは覆面である。かたや、スペインから独立間もないカリフォルニア地域の有力政治家に立ち向かう青年を描く映画「快傑ゾロ」の原題は「The Mask of Zorro」で、この主人公は頭巾のように頭から目の下までの顔の半分近くを覆う布の覆面を着けている。同じように、外国映画で見かける仮面舞踏会の参加者は顔の半分あるいは全面を隠すような面を着けて素顔を隠し、自分が何者かをわかりにくいようにしている。文字通り「仮」面である。それはある意味の身元保護といえるだろうか。そして保護ということでは、野球の捕手やフェンシングや剣道の選手は、競技中や練習中に顔面や頭部を負傷しにくくするための道具である防具を着用するが、これもマスクである。

これらの例のマスクは着用者の素性を伏せる、顔面を保護する、という目的のために用いられる道具である。素性をわかりにくくするという場合には、マスクは覆面であるし、外の害から身を守るという場合は防具という訳語が当てはめられたりしている。そして防具として頭部から顔面を覆うマスクには、有毒ガスの吸引を防止する防毒マスクやガスマスクなどもある。

一方、日常生活や医療現場で鼻、口などの顔面の器官を覆うことで、塵埃や病菌が体内に入り込みにくくすることや、体内からの分泌物の排出を抑制する装着具としてのマスクもある。それらは、産業用、医療用そして家庭用など使用目的や使用場所などによって分類されており、産業用のマスクには国家検定規格がもうけられている。例えば、N95として知られているマスクは、空気中の粒子捕集効率試験で95パーセント以上の成果を出すと判定されたものである。

性能に関しての公的な規格は厳密ではないものの日常生活で用いられているマスクもある。製造に携わる企業の関連団体である一般社団法人日本衛生材料工業会によるとマスクとは「天然繊維・化学繊維の織編物または不織布を主な本体材料として、口と鼻を覆う形状で、花粉、ホコリなどの粒子が体内に侵入するのを抑制、また、かぜなどの咳やくシャミの飛沫の飛散を抑制することを目的に使用される、薬事法に該当しない衛生用製品」である〔一般社団法人日本衛生材料工業会〕。今日市場には多くのマスクが流通しているが、それらは平形、プリーツで立体的に変化できるもの、そして最初から立体として成型されているものの3種類に大別することが可能で、これらのどのタイプであっても鼻、口を覆う部分とそれとつながる耳にかける紐状の繊維やゴムでできあがっている。

## マスクの歴史

住田によれば〔2021〕、今日のマスクの原型は19世紀半ばの英国で呼吸器疾患の患者のために考案された「呼吸器（レスピレーター）」である。鼻と口の覆いには格子状の金属が組み込まれ、吐いた息の温度がその部分で保たれて湿気のある空気を吸えるようになっていた。この種の呼吸器は明治維新を経て間もない日本にも上陸をしたようで、呼吸器は服飾用品の1つとして受け入れられた〔同 2021〕。

呼吸器の日本最古と言われる1897年の広告には、「…此器は大氣に觸れて乾濕ともに變色せず腐蝕せずこれ他種に比して卓絶足るところなり抑も共用あるや雨露曇霧を侵し或は風塵の間に行歩し又は暖室を出て劇場を去るが如き頃に寒冷に觸る等に際しては必ず携帯するべき要器たり又共効驗は寒胃を防ぎ咳嗽を止め氣管炎其他呼吸器諸病を防止する等數ふるに暇あらず…」とあり、室内外の気温差からの身体保護とそれにとまなう健康への効用を唱っている〔宮武 1925：住田 2021より引用〕。

服飾品だった呼吸器が衛生用品のマスクとして日常生活へ浸透していくきっかけになったのは第1次世界大戦の末期に流行したスペイン風邪だった。この時期マスクの着用が風邪の「バイキン」の体内への侵入防止に有用であるという広告がなされるようになる（広告ポスターについては後述）。そして、第2次世界大戦後には学校給食時の担当係となった生徒がエプロンとマスクを着用して配膳するようになっ

た [読売新聞オンライン 2020年10月30日]。こうした集団経験がマスク着用を日常行為の1つとして定着させ、マスクは「清潔」「衛生」保持を表象する道具として人びとの間に受容されてきた。今や、季節性インフルエンザの流行時期やアレルギーを引き起こす花粉の発散時期になると予防措置としてマスクを着用して街中を往く人びとの姿は風物詩のようにになっている。

一方、マスクが最初に考案された英国をはじめとする欧米諸国では、日常生活でのマスク着用の習慣は定着しなかった。桜井によれば、英国ではインフルエンザや花粉症の季節でもマスクを着用している住民はほとんどいない [桜井 2012:7]。

## マスク着用効果についての相剋する見解

健康管理のための道具としてマスクを受容している日本では、季節性インフルエンザの流行時や花粉が飛び始める頃になると、その利用は広く受容されている。しかし、マスク着用の受容度には国や地域で異なっている。1918年に発生したいわゆる「スペイン風邪」のパンデミックが発生したときには欧米諸国ではマスクの着用が推奨された。米国では第一次世界大戦への参戦と軍隊の派兵も関係しており、マスク着用の効果の研究が行われたようである [Barry 2020(2004):211]。そして後にはニューヨークなどではマスク着用が義務化もされた [ibid.340,350]。マスクの使用が求められる一方で、それに対して反対をする市民もいたようで [Adams 2020, History.com]、このときの感染流行が収まると欧米の人びとのあいだではマスクは着用されなくなった。この傾向は日本でも見られ、1918年前後のインフルエンザのパンデミック時にはマスクの利用が提唱されたが、流行が収まるとマスクの使用は下火になったという。ところがそれからしばらく経った1930年代半ばに日本で新たなインフルエンザが流行するとマスクが改めて着用されるようになり、その後感染が起こるたびに人びとのあいだでのマスクの需要は高まったという [東京医療用品卸業界 平成7年]。

国や地域でマスク着用の受け止め方が違う一方で、マスク着用効果は医学的な見地からどのように評価されてきているのだろうか。70年以上も前にガーゼマスク着用による飛沫伝染防止の研究がある。この研究を行った豊川や榊原は [1951]、すでに感染している人が装着すると、その人から排出される飛沫での伝染防止には効果を期待できるが、健康者が使用してもその効果に疑問が生じる、と指摘している [豊川行年、榊原士郎 1951 (桜井 2012:44から援用)]。これはマスクの素材であるガーゼが多孔性であることと関連していると思われるのだが、それから半世紀以上も経過し不織布がサージカルマスクの主な素材となっていた2000年代に入っても類似した見解が提示されていた。

2009年新型インフルエンザ (H1N1) が流行したとき日本政府は関係省庁会議を催し「新型インフルエンザ対策行動計画・ガイドライン」を策定した。この中の「個人、家庭及び地域における新型インフルエンザ対策ガイドライン」には、マスクに関しては次のような見解が示されている。「発症した人がマスクをすることによって他の人に感染させないという効果は認められており、自分が発症した場合にはマスクを着用することが必要である。他方、まだ感染していない者がマスクをすることによってウイルスの吸い込みを完全に防ぐという明確な科学的根拠はないため、マスクを着用することのみによる防御を過信せず…」 [新型インフルエンザ及び鳥インフルエンザに関する関係省庁会議 2009:136]。つまり、感染した人や有症者には飛沫排出抑制の効果はあっても、健康者のマスク着用に関しての予防効果は定かではないということである。これに類似した見解は別の研究でも示されている。

カウリングらは [Cowling, Zhou, Ip, Leung and Aiello 2010]、2009年の新型インフルエンザ流行期に発表されたマスク着用と感染抑制効果に関わる一連の研究を評価している。この中でも、感染している患者がマスクを装着すると飛沫排出抑制の効果があり、感染を広めないということでの予防策になりえるが、未感染者がマスクを使用することで罹患を防ぐというデータはほぼない、と結論している。

同じ時期にブリーネンらも [Brienen, Timen, Wallinga, van Steenbergen and Teunis 2010] マスクの効

能を調べ、マスク着用が集団（population-wide）で実践されるとインフルエンザの大流行を遅らせる効果はあり、マスク着用はインフルエンザの発生を抑制する程度までの数の減少をもたらすと述べている。

マスクがインフルエンザ拡大抑制に効果があるという、類似した見解はミルトンらによっても提示されている [Milton, Fabian, Cowling, Grantham, McDevitt 2013]。この研究に基づいて、ハーバード大学の公衆衛生大学院の2013年3月13日付けのニュースレターでは、マスクはインフルエンザ流行抑制に効果がないとはいえないという指摘している [Roeder 2013]。

これらの研究から明らかなのは、すでに感染している人がマスクを着用するのは感染を抑制するという点で効果はあるが、健康な人、あるいは未感染者が着用しても感染を予防するかどうかには疑問が残るとするのが専門家たちの見解だということである。それにもかかわらず、日本では感染した人はもとより、未感染者や健康者が感染予防を前提とした体調管理の防具としてマスクが受容されているのである。さらにそれだけでなく、マスクを服飾品の1つとして「伊達に」愛用する人たちさえも登場しているという報告もある [ARERAdot. 2014]。マスク着用については、世界的な評価とは異なる見方が日本の人びとのあいだにあるといえそうである。

今回の新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた2020年1月24日、英国放送協会（以下BBC）は「マスクは有効？ ウィルスの感染拡大を防ぐには」と題された記事を発信した。この中でBBCの保健担当記者は、中国での大気汚染と新型コロナ流行への対処としてマスク着用者が多いが、ウィルス学者は、マスクは空気感染についての予防効果を疑問視していると述べて、ロンドン大学セント・ジョージ校のデイヴィッド・キャリントンの見解を提示している。

キャリントンによれば、「一般向けのマスクは隙間が多すぎ、空気フィルターもなく、目も防護されないため」空気によって運ばれるウィルスやバクテリアの予防には効果がない」。しかしながら、マスク着用は、くしゃみやせきによる体外への「噴出」を和らげたり、装着しているあいだは「手に付着したウィルスを口から体内に入れてしまうのを防いだりすることはできる」という。さらに、記事は、病院のような環境が十分に制御された状態では、「顔を覆うマスク」は「専用呼吸器が同じくらいの効果を発揮した」というが、同時に、「一般的な環境でのマスクの効果については、データもそれほど芳しくない。長い間マスクを着用し続けることは非常に難しいことだ」という別の者の言葉で結んでいる。

その後イタリアでは緊急事態宣言が発令され（1月31日）、他地域への人的移動はもちろん自宅周辺での外出さえも制限されるようになり、新型コロナウイルス感染の深刻さがより明らかになった。2月11日WHOは新型コロナウイルスによって罹患する疾患をCovid-19と命名した。そして、同月28日に、WHOはこのウィルスの世界規模で大流行する危険度を「非常に高い」（最高レベル）に引き上げたが、世界的な大流行を指すパンデミックではないと判断していた。

WHOの見解を報じた2020年2月29日のBBCの記事では、新型コロナウイルスの感染を回避するための方策が示されている。それらは、①せっけんとうす、あるいは消毒用アルコールによる手の洗浄、②せきやくしゃみをする際には鼻と口をティッシュやひじの内側で覆う、③風邪やインフルエンザのような症状を示す人との濃厚接触を避ける、④肉や卵は十分に加熱する、そして⑤野生動物や家畜との無防備な接触を避ける、の5つで、マスク着用は求められていなかった。

マスク着用に消極的な報道はその後も続いた。3月4日の「新型ウィルスにマスクや手袋は有効？」というBBCの番組での解説番組では同局の保健担当編集委員は、「マスクは誤った安心感を与えてくれるが、これらは医療従事者にとっておくべきである。感染者が着用するのは有効だが、感染者はもともと外出せずに自宅にとどまっておくべきだ」という。そして、英国のあるマスク製造会社が「新型コロナウイルスの流行をマスクで防ぐ」という宣伝をすると、英国の広告基準協会（the Advertising Standard Authority: ASA）は、この宣伝は「誤解を招き、無責任で、正当な理由なしに恐怖を生む可能性が高い」と判断し、それらの広告を禁止するということが起こった [ASA 2013年3月13日]。これは、ASAが新型コロナウイルスの予防法としてマスクの使用は推奨していない、とする英国当局者の姿勢を支持しているこ

との表れだと、BBCは伝えている [2020年3月4日]。

3月11日WHOは今回の新型コロナウイルスによる世界規模での感染拡大をパンデミックとする声明を発した。そして同月下旬に入ると、マスク着用全否定ともいえる状況に疑問を投げかける記事が登場する。例えば、BBCは2020年3月26日の「マスクをする国、しない国 何が違うのか?」という記事を掲載した。

この記事は、マスク着用を世界的に眺めてみると、着用が当たり前となっている場所とそうでない場所があるが、それはそれぞれの国や地域の行政や医療上の助言だけでなく、文化的な規範や影響によるものだ、という文章から始まる。しかし、今回のパンデミックが悪化するにつれて、状況は変わるのだろうか?と尋ねるのである。マスク着用は不要一辺倒だったBBCの従来の見解に、自局の記者が疑問を呈したのである。

記事では、「混雑した場所で多くの人がマスクを使えば、大勢への伝染という観点からは一定の効果があると思う。現時点では、伝染を減らすためにどんな小さなことでもやろうとしている。ちりも積もれば山となる」という香港大学の伝染病学者ベンジャミン・カウリング氏の発言を受けて、新型コロナウイルスが引き起こした未知の感染症にかかわる新しい証拠や研究成果にも影響されて、マスクの使い方は変わるかもしれない、と結ばれている。

しばらくするとワシントン・ポスト (*The Washington Post*) 紙は米国疾病予防管理センター (以下CDC) が、マスク (face coverings) の使用をホワイトハウスに提言する準備をしているという記事を報道した。そして、2020年4月4日のロイター (Reuters) はケランド記者による「マスクがインフルエンザとある種のコロナウィルスの拡散を抑える、という研究発表がなされた」という記事を掲載した。また、感染者が咳やくしゃみで排出する飛沫回避は単に物理的な間隔だけでなく、マスクによって感染者の呼吸の流れを遮断し、空気中のウィルスが口から侵入しないようにするのが望ましい、という研究報告が出されるようになった [例えば、Howard et al. 2020]

2020年3月末から4月にかけて、未感染者や健康な人のマスク着用には後ろ向きであったヨーロッパ諸国では方針転換が行われるようになり、マスク着用を推奨する動きが明らかになった。ドイツでは4月末までにすべての州でマスク着用が義務化された。中には罰金を科す州もでた。5月に入ると世界中で34を超える国や地域がマスク着用を義務化した [例えば、Martinho-Corbishley 2020]。

非感染者あるいは健康な人のマスク着用をいわば全否定していた英国でも2020年7月20日をもってマスク着用を義務化し指定された場所や施設そしてサービスを受ける際のマスク未着用には罰金が科せられた。同様の対応は米国やオーストラリアでも取られるようになった。ニューヨーク州ではマスク着用拒否者には最大1000ドルの罰金が科せられることになった。オーストラリアの場合州ごとに差がある。メルボルンを州都とするヴィクトリア州では自宅外でのマスク未着用には200豪ドルの罰金が科せられることになった。

マスク着用は70年以上にわたり、既感染者や患者が着用することに効果があると見なされ、未感染者や健康な人のマスク着用は不要とされてきた。しかし、新型コロナウイルスが引き起こしたパンデミックによって、マスクは健康者や未感染者が着用することでも感染拡大抑制効果があることを示すことになったのである。

2020年末から21年のはじめ頃になるとマスクの着用は世界的にも急速に定着した。日本リサーチセンターによるマスク着用率に関わる世界23カ国地域調査によると [2021]、2020年の3月時点でヨーロッパ諸国や北米でのマスク着用率は英国で2パーセント、ノルウェー3パーセント、デンマークとドイツは1パーセント、米国とカナダはそれぞれ5パーセントと6パーセントであった。それが、2021年1月になると、英国74パーセント、ノルウェー62パーセント、デンマーク65パーセント、ドイツ75パーセントそして米国は80パーセント、カナダは84パーセントにまで変化していた。人びとの行動変化は明らかである。このような劇的な変化は自宅外でのマスク未着用には罰金を科すという法的措置が、直接的な

効果をもたらしたのだらうと推測できる。同時にパンデミック拡大防止を目指してさまざまな広報活動が多様なメディアを通して展開されてきた。これらにより、マスク着用の必要性についての人びとの認識や意識が変化したのだらうとも考えられる。どのような広報がなされたのだらうか。次の項では、それらの広報活動手段の中からポスターに注目して、マスク着用の必要性を訴求するポスターに注目する。

## ポスターについて

全否定していたマスク着用が必須だと大転換したとき、それを周知する対応がなされ始めた。広報による周知である。今の時代の広報はインターネット、TV、ラジオ、新聞などのメディアを当然のように利用するが、壁や柱に一定期間貼り付けられたまま人びとの目にさらされているポスターも広く利用されている。

文字と紙への印刷によって作られているポスターは広告、告知のための情報伝達媒体としては極めて古い。ポスターは同じ情報が大量に印刷され、市中の街頭や建物の内外の柱や壁に貼り付けられる。そのため、ポスターが掲示されているあいだ同じ情報が往来する不特定多数の人びとの目に触れられている。

ポスターは多くの場合限られた2次元の空白（紙の上のこと）に広告とそれを表象する芸術（アート）を組み合わせている。そのためポスター自体が芸術作品として人びとの目を楽しませるだけでなく、宣伝されている品やサービスへの注目を集めることになる [Holden 2007:9]。そしてポスターは壁や柱に貼り付けられているあいだ文字通り24時間一日中人びとの目に触れられることになるので、ポスターに用いられて伝達すべきメッセージはわかりやすく、人を引きつけられるように工夫されている。具体的には、用いられる単語数はせいぜい6から7つで、テキストは簡潔で人の情感に訴えることが必要だという見解もある [例えば、O'Guinn, Allen and Semenik 1998:446]。

告知や広告のメディアとしてポスターには長い歴史があるが、それ自体の効果を科学的に測定することは難しい。掲示場所、新聞、ラジオ、TVなどの別の媒体でも並行して広告や告示がなされるかなどによって効果が左右されている、とホールデンはいう [Holden 2007:15]。ホールデンによれば、オーストラリアに初進出したベルギー産ビールの路上広告は、英語を母語とするオーストラリア人に原産地の発音で注文させるようになる効果はあった、という [ibid.16]。

藤村と谷口は、ポスターが呼びかける電車内におけるマナー啓発メッセージが、実際の行動に対する意識や行動実態への影響を調べている [藤村・谷口 2017]。研究の主眼は用いられているメッセージが持つ影響であるが、芸術（アート）をともなう文字で示されているメッセージが訴求力を内包していることを示唆している。

医療分野では臨床での感染制御および予防を目指す啓発運動にポスターを利用することが多いらしい [Jenner, Jones, Fletcher, Miller and Scott 2005]。ジェナーらの研究も臨床現場の医師やその他の医療従事者に手先を清潔に保つための衛生管理としての手洗いを訴えるためのポスターにおいて、どのようなメッセージがより効果的なのかを検討している。メッセージのあり方は改めて検討することにして、ここで確認しておくべきはポスターが宣伝や告知そして公示に有効なメディアであることを示していることである。

## マスク着用促進ポスターのあれこれ

新型コロナウイルスがもたらした新しい感染症（Covid1-19）の罹患を回避するための予防策を示したポスターが多種制作され、街頭に掲示された。それらにはいくつかの様式があった。1つは、Covid-19がもたらす症状の特徴、発症した時の対象法や連絡する医療機関などの情報、そして自助としての予防

策の紹介で、文字による情報（解説など）が中心になるものである。こうしたポスターには店舗や交通機関を含む公的機関を利用するさいの留意事項が書かれていたりもした。

また、実際店舗や人が集まる場所や建物そして施設の入り口ではマスク着用義務、手指消毒の励行、出入口の区別などを示す告知的ポスターもあった。そして、これらに加えて、人びとの意識や新型コロナウイルスに関する知識を提供し、それへの認識を変更させ、日常生活行動に変容を起こさせることを意図した啓発的なポスターも制作された。それらのポスターは人びとの目につきやすい場所に掲示されていた。

以下では、啓発関連の中からマスク着用促進を目指したポスターに焦点を当てる。取り上げるのは3つの国で制作された広報ポスターである。1つはマスク定着度が高い日本がマスクの導入を試みた時期のポスター、2つめはマスク着用を長らく否定していた英国の例、そして3番目は新型コロナウイルス感染が急速に拡大していた時、世界でもっとも多くの感染者が生まれた米国のニューヨーク州ニューヨーク市交通局（MTA）が電車バスの車内で掲示していたポスターである。「MTA制作ポスター」については、便宜上「米国のポスター」と表すこともある。

## 日本の場合

今回の新型コロナウイルスの感染が拡大する以前から日本ではマスク着用は受容されていた。しかし、今のマスクの原型とも言える呼吸器が日本にもたらされた19世紀末には、それは服飾品の1つであり、衛生用品の扱いではなかった。マスクが現在のように飛沫排出抑制、埃、塵（後には花粉が加わる）そしてウィルスの吸引回避という目的で使い始められるのは20世紀に入ってからであった。

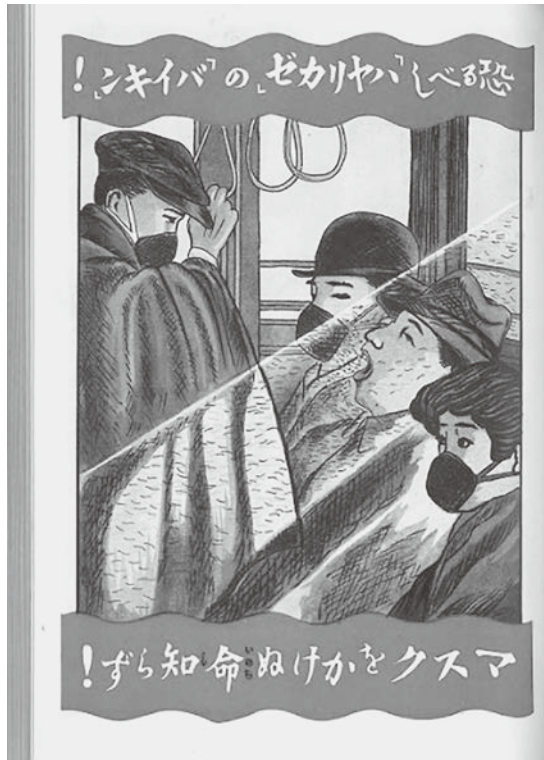
第一次世界大戦が終わろうとしていたとき、世界規模でのインフルエンザ（スペイン風邪）が大流行した。日本では1918年7月から1921年7月までの3年間に3回の波があり、この間に約2300万人が罹患し、39万人近くが死亡した〔池田他 2005、奥積 2020〕このような状況下で、当時の政府は人びとにマスクの着用、うがいなどの感染予防策を訴えるためポスターを制作し広報をしている〔内務省衛生局著 1922〕。資料1は当時のポスターをまとめたもので国立保健医療科学院の図書館所蔵のものである。こ



資料1 「流行性感冒」 内務省衛生局著（1922.3）

[<https://www.niph.go.jp/toshokan/koten/Statistics/10008882-p.html>]





資料2



資料3

[<https://www.niph.go.jp/toshokan/koten/Statistics/10008882-p.html>] から抜粋

れらの中でマスク着用促進を意図していると思われるポスターとしては資料2と資料3の2つが該当する。

2つのポスターは中心に大きくイラストを配置し見る人にどの場面かを容易に連想させる。資料2は列車内の座席に座っている客と立ち客が描かれており、座っている客の1人はマスク未着用で口を大きく開けて居眠りをしている。残りの3人の乗客はマスクを着用している。

ポスターの見出し文は上下にそれぞれ1つずつあわせて2つある。両方とも赤を背景色にして、文字が白抜きで書かれている。上段の見出し文は「恐るべし『ハヤリカゼ』の『バイキン』!」、下段の見出しには「マスクをかけぬ命知らず!」と2つの文には感嘆符が付記されている。

資料3のポスターにはイラストは2種類ある。2つのあいだにコマ間を左から右へ斜めに配して、ここに見出し文を書き込み、上下にイラストを描いている。上段のイラストは列車内で座っている客が描かれている。客の数は全部で6人、1人は背を向けた子ども、前を向いている大人のうち中央の2人の男性はマスク未着用で右側の男性が咳をして飛沫が飛んでいる。下段のイラストは、車内の客が帰宅した直後のようにもみえ、土間からの上がり口で大人と子どもがうがいをしている。

2つのイラストのあいだに挟まれたコマ間には「汽車電車人の中では『マスク』せよ、外出の後は『ウガイ』忘るな」という見出し文を入れている。ここではマスクとウガイがカタカナで記され、朱色のカギ括弧で囲まれている。

ポスターの右下の角には右から左への読み方で「『マスク』とうがい」というポスターのテーマを挿入している。ここでのうがいは平仮名で表記されている。

資料3が興味深いのは、ポスターテーマの見出し文に対角線上にある吹き出しのイラストとその説明文である。この吹き出しには、発熱して氷嚢で額を冷ましている人の姿とその左側に「『マスク』をかけぬと…」という台詞が挿入されている。

資料2と3の2つのポスターが、マスク着用を促す啓発ポスターであることは容易に判断できる。そして資料2が「『マスク』をかけぬ命知らず」という文言で、マスク着用の有無が命に左右する行動だと

示唆しているし、他方は『『マスク』をかけぬと…』と文言を途中で切り、感染がもたらすであろう深刻な状況を連想させているのである。

## 英国の例

英国でマスク着用が義務化されたのは2020年7月24日であった。この日から自宅以外の公共の施設や交通機関内でのマスク未着用には罰金が科せられることになった。

既に触れたように、英国では、マスメディアでも医療関係者の間でもマスク着用は感染者には認めても未感染者や健康な人の着用には否定的、あるいは後ろ向きの発言がなされてきた。英国ではこうした風潮をいわば反転させる必要があった。ポスターは英国政府が作成しているが、広報はNHS（National Health Service）とともに行われている（NHSは英国の公的な医療提供機関で、そのままNHSとか「国民医療サービス」あるいは「国民保健サービス」と称されていることが多い）。



資料4 <https://coxgreen.gov.uk/covid-19-face-coverings/>



資料5 <https://newsroom.shropshire.gov.uk/2020/08/face-coverings-council-buildings/>

これらのポスターではイラストの代わりに実写の写真を採用し、マスクを着用している人物の上半身を明示している。ポスターには、マスク（mask）やそれに相当する顔の覆い（face covering）の用語は出ていない。大きな文字で示されている見出しは2つのポスターとも同じで次のような訳ができそうである。「わたしがマスクを着用しているのはあなたを守るため。あなたもマスクを着けて、わたしを守ってね」

なお、資料4の見出し文の下には、「公共交通機関乗車中は鼻と口を常に覆っておかねばなりません。ただし、着用不要を示す相当の理由がある場合を除外します」とある。

## 米国MTAの車内ポスター

ニューヨークの交通局が利用者に乗車時のマスク着用を義務づけたのは2020年4月17日からであった。最初に資料6のポスターが作成され、駅構内、電車バスなどに紙媒体そしてデジタルの映像媒体で掲示されるようになった。ここでは、大見出しに「安全な移動」と最上段の黒帯に記し、黄色を背景にして黒文字で「そ



資料6 <https://new.mta.info/safetravels> より



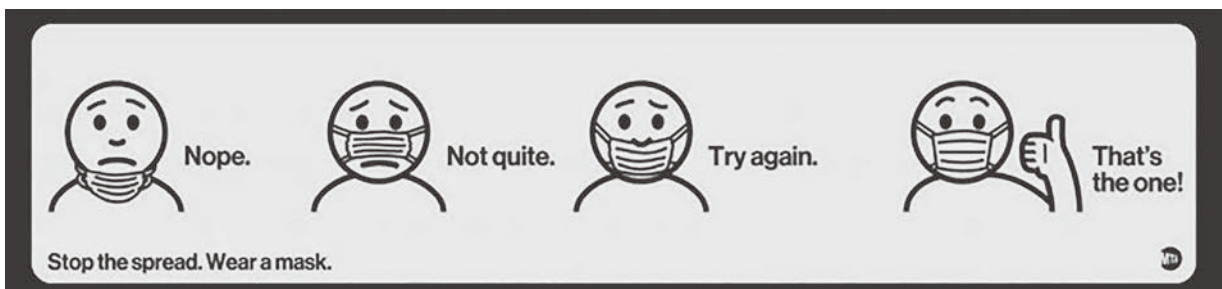
資料7 ニューヨーク地下鉄車内のポスター  
2022年7月著者撮影

れらを覆ってね」という見出し文をつけている。

「それら」はさらに小さな文字で「乗車時には鼻と口を布あるいはマスクで覆ってください」と記されている。右下には「感染拡大を止めよう。命を救おう」とある。この段階では、鼻と口を覆うのは、マスク (mask) でも布 (cloth) でもどちらでも良かった。その後MTAは利用客にマスク着用を促す各種のポスターを作成していった (<https://new.mta.info/safetravels>参照のこと)。

これらのポスターは電車やバスの車窓と天井のつなぎ目部分(資料7)や乗降口ドアの戸袋にあたる壁部に掲示される。日本の場合、電車の乗降口の吊り輪用の金属柱を利用して週刊誌の発売などを知らせる広告があるが、あれば吊り下げ広告でポスターと区別されている(英国の鉄道列車やニューヨークの地下鉄などの鉄道列車内で吊り下げ広告を見ることはない)。

以下で示すのはニューヨーク市内を走る地下鉄列車やバスの車内で掲示されたポスターである。どのポスターも黄色い下地に黒で人物像が描かれている簡素なイラストで、テーマは正しいマスクの着用である。全部のポスターの下部には「感染拡大を止めよう。マスクを着用しよう」と記されている。



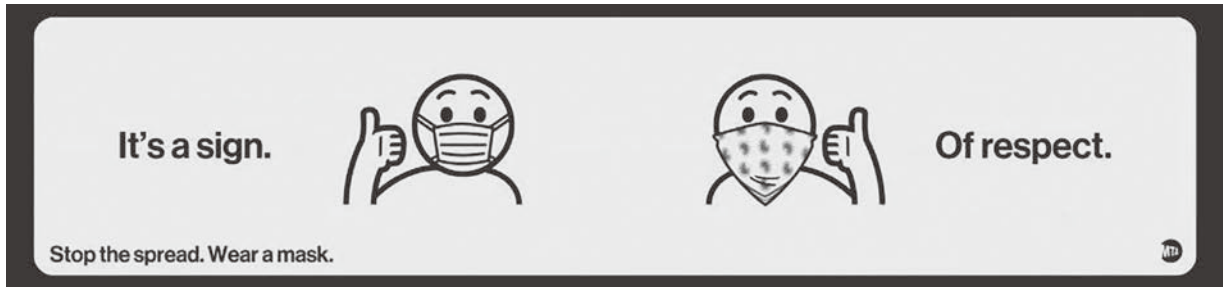
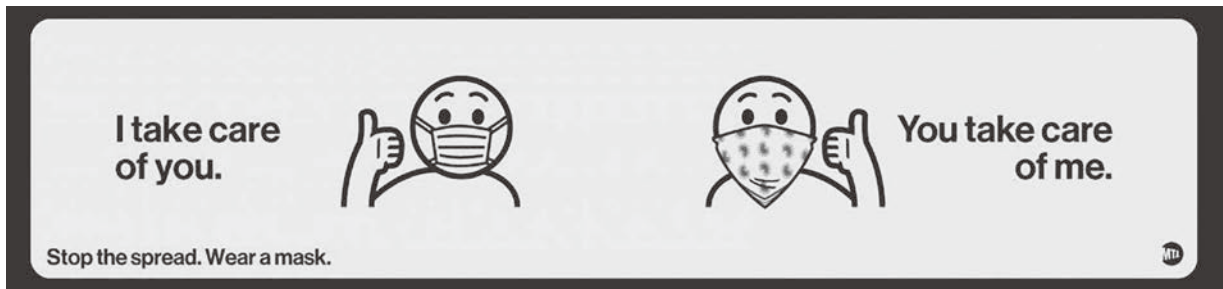
資料8 <https://new.mta.info/safetravels> から

最初に示している資料8には、マスクの着用の仕方の例が示されており、それぞれの可否を文字で示している。左から「ダメ (Nope)」、「まだダメだね (Not quite)」、「もう一回試そう (Try again)」、「それだね (That's the one)」と説明文がついている。

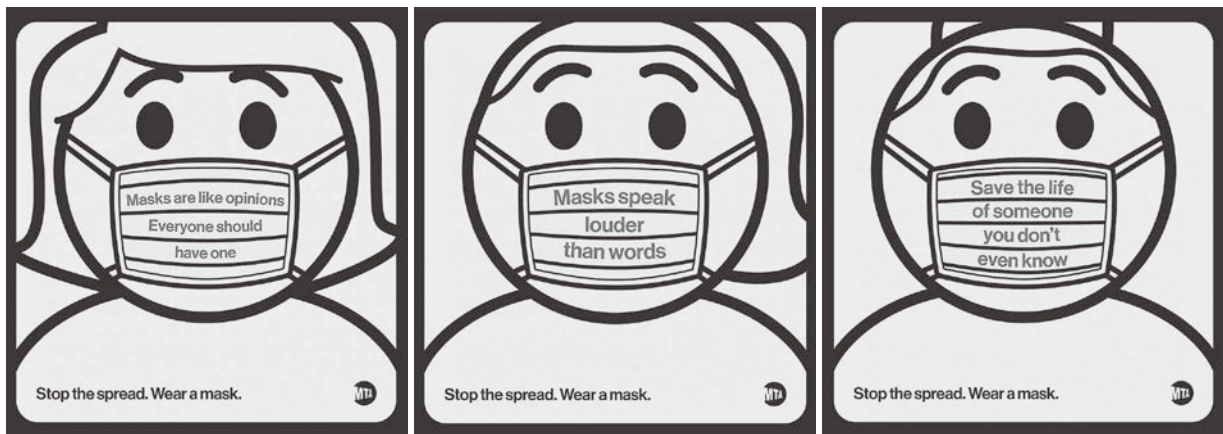
別のポスターでは英国のポスターと内容的に同じメッセージを伴っているポスターもある(資料9)。上段の文章は左側に、「わたしはあなたのことを大事にしている」、右側は「わたしのことを気にかけてくれているのね」とある。そして、下段のポスターには、マスクで口と鼻を覆ったイラストの横に、「マスクは敬意(リスペクト)の表れ(サイン)です」と書かれている。

車内の天井と窓枠のあいだのスペースに掲示されたこれらの横長のポスターの加えて乗降口横の戸袋の壁部の空間には資料10のa)~c)のようなポスターのいずれかが掲示されている。人物が大きく描かれ、マスクにはそれぞれの見出し文が記されている。

左の(a)から「マスクは意見のようなもので、みんな1つはもつべきだ」、(b)は「マスクは言葉よりもをいう(直訳は、大きな声で訴える)」そして(c)は「知らない誰かの命を救おうよ」と書いてある。1つの図柄を用いたパターンは他にも作成されており、ハロウィーンの時期にはカボチャを模した人物が、感謝祭の時には七面鳥が登場してマスク着用の必要性を訴えている。



資料9 <https://new.mta.info/safetravels> から



(a)

(b)

(c)

資料10 <https://new.mta.info/safetravels> から

これらの一連のポスターは、マスク着用には慣れない人びとに着用法を示し、そしてマスク着用の意義を知らせようとする姿勢を読み取ることができる。

一方、同調圧力的な発想を描いているイラストを用いたポスターも作成されているので提示しておく(資料11)。



資料11 <https://new.mta.info/safetravels> から

このポスターでは、真ん中の人物はマスクをあごにまで下ろして鼻と口を露出させた、いわゆる、あごマスクにしている。その人物に対して、きちんとマスクを着用している他の4名が眉をしかめて「こんなふうにはならないで」と書いてある。

## 比較

日本のポスターはスペイン風邪が流行した第一次世界大戦後の1920年に作成されたものである。それに対して、英米のものは、今回の新型コロナウイルス感染拡大阻止を目指した広報に採用されたものである。両者の作成された時期には100年の時間差があり、それぞれの特徴があるが、同時に共通点もある。

まず、すべてのポスターがマスク着用を推奨し、芸術（アート）と見出し文による広告という2つの要素が含まれている。芸術（アート）の部分では、英国のポスターでは実写写真が用いられている一方、日本と米国の作品ではイラストが用いられている。日本と英国のポスターで用いられているイラストあるいは写真では、マスク着用の図が強調されている。英国のポスターの場合、人物の顔が大きく示され、鼻と口をきちんと覆っているマスク着用の図柄となっている。それに対して、日本のポスターではマスクを着用している人びとの間に未着用の男性が口を開けて居眠りしているイラストとなっている。こうした違いは添えられている見出し文を反映していると考えられる。つまり、日本では、「マスクをかけぬ命知らず」や「汽車電車人の中ではマスクをせよ」を伝えるために、口を大きく開いて居眠りをしている男性や、マスクをかけた人たちの間にマスク未着用の男性を配置し、そして咳によって飛沫を排出しているような場面を描き、下のウガイすることが必要だと思わせる場面へとつないでいる。

見出しの宣伝文については、英国のポスターは、マスクを着用する理由あるいは、それによってもたらされる恩恵を示す見出し文となっている。「あなたのためにマスクを着ける」というメッセージは、マスクは自分も守るが、それ以上に他者保護につながっているという利他性があることを訴求していると考えられる。

これらの2つに対して、米国のポスターは、まず横長のポスターのそれぞれの人物はマスクの望ましい着用方法を説明している。そして乗降口横の壁部掲示の大きなポスターの1つはマスク着用が当たり前だということ（「マスクは意見のようなもので、みんな1つはもつべきだ／あるいは持っているはずだ」）、あるいはマスク着用がもたらす社会的な意義（「マスクは言葉よりもものをいう（大きな声で訴える）」「マスクの着用は見知らぬ誰かの命を救おう」）というような提示することで、マスクを着用することが必要だと示しながら、ポスターを見る人にマスク着用の必要性を訴求している。

1920年代の日本のポスターに示された「マスクをかけぬ命知らず」や「マスクをかけぬと…」と台詞を入れて寝込んだ男性を描いている吹き出しのある2つのポスターはともにマスク着用の効用を語っていながらも、ともすれば、ある種の恐怖心をおおっているようにも捉えることができる。これは、対処のための行動（ポスターではマスク着用）を取らなかった場合、身に降りかかと思われる事象（同、発熱による寝込み）を示すことで行動の変容を推奨しているものと考えることが可能で、ある種の脅威アピールとも言えそうな方法である [例えば、島田・荒井 2017]。

脅威あるいは「恥」の気持ちを持たせるような文言を用いる傾向は、1918年の「スペイン風邪」のパンデミックの際の米国でのマスク着用促進キャンペーンでも同様にみられた [History.com]。ただし、この時にはアートと宣伝文を組み合わせたポスターではなく、警告文を記した公共広告（public service announcement）として公表されたものであった。警告の文言には「唾棄は死を広げる（Spit Spreads Death）」「マスクを着用せよ。さもないと刑務所行きだ（WEAR A MASK OR GO TO JAIL）」「マスク非着用者（Mask Slackers）」「恐るべき唾棄（‘Deadly’ Spit）」などが用いられていた。これらの警告文を広告することでマスク着用の意義を訴え、人びとに新しい行動様式の重要性和実際の行動変容を求めたのである。

一方、2020年の新型コロナウイルスの大感染に対処する際のマスク着用促進キャンペーンでは、すでにこれが定着していた日本では着用の意義を訴えるようなポスターは登場しなかった。マスク着用になじみがない人びとが多数を占めている英国や米国のポスターでは、1918年のパンデミックの際に登場し

たような脅威をアピールするのではなくマスク着用は他者への思いやりの表れだというイメージを提示し、自身のマスク着用は他者のためになるという利他主義とそれを担う自分があるという自己の効力感に訴えているようにも捉えられよう。

ポスターには時代やその時どきの社会風潮や価値観はもちろん、それらが作成される国や地域の社会的文化的政治的状况さらには審美観などが複雑に反映されている。それだけに、20世紀初頭のパンデミックの際に登場したポスターと、新たな新型コロナウイルスが引き起こしたパンデミックに対応するための生活様式を訴求しているポスターを単純に比較し、優劣を語ることはできないし、その必要もないだろう。パンデミック時の自己防衛策としてのマスク着用を訴える日本、米国、英国におけるポスターには上記のような特徴が見られたということである。

## おわりに

2020年に世界規模で拡大したCovid-19のパンデミックは、マスク着用について、それまで消極的あるいは否定的姿勢を示していた国や地域において、マスクの着用を積極的に推奨するという、マスクの効用に関わる肯定的評価へと大転換を引き起こした。世界中の国や地域の公共交通機関の駅舎、電車バスそしてタクシーの車両の乗降口のドアや入り口、そして車内においても、さらには街では官民間わずほとんどの建物や施設の入り口にはマスク着用を求める掲示が張り出されるようになった。また公的な関係機関による広報活動などによって、2020年の年末には、それ以前にはマスク着用者の比率が数パーセント台だった英国や米国において、60パーセント以上の人が着用するようになった。

このような行動変容が急速に起こった直裁的な要因は法的な根拠をもとに自宅外でのマスク未着用者には容赦なく罰金するという強制力が行使されたからである。それがゆえに英国や米国でも大半の人がマスクを着用するようになったのである。人びとにマスク着用を訴えた広報は補助的な役割を果たすにとどまっていたと思われる。マスク着用がどれほどの程度浸透したのかを判断することは難しいのが実情だろう。

新型コロナウイルスとの生活が丸2年が過ぎた2022年になると英国では他のどの先進諸国にも先んじてマスク着用義務を廃した（2022年1月27日から）。米国では、裁判によって2022年4月19日以降マスク着用義務は廃され、任意となった。これらの動向はマスク着用からの解放は大きな意味を持っていることを示している。

では、英国や米国の人びとは、これらの決定でマスク着用の束縛から解放されたのだろうか。マスク着用義務を解いた判決がなされてから2ヶ月余り経った7月初旬著者は所用で渡米し、中西部のシカゴ、東海岸のボストン、ニューヨークに滞在した。これらの大都市の繁華街や町中の公園などの広場で見かけたのは、多くの人びとがマスクをかけている姿だった。そしてこの時点では、多くの建物や施設ではマスク着用推奨の案内がなされていた。実際、ニューヨークの地下鉄などの公共交通機関でマスク着用が任意となったのは2022年9月9日からだった。オーストラリアでも国際線の航空機内でマスク着用義務が廃されたのは9月9日からだった。

このように多くの国や地域で、新型コロナウイルス感染拡大防止措置の象徴とも言えるマスク着用義務は徐々に解除されているが、今後マスク着用はどうなるのだろうか？新型コロナウイルスが隣り合わせの生活が始まって2年半たった春先の日本でのある調査によると自宅から100メートル程度離れたときでさえ、人びとのほぼ全員がマスクを着用しているという傾向があった [Suzuki 2022]。また、真夏には、熱中症の危険が叫ばれていたにもかかわらず、全体としてはマスクを外す人は多くはなかった。マスク着用は日本では依然として実践されている。マスク着用は法的に強制されているわけでもない日本では、2022年秋に入ってからマスク着用要請を解除する、しないという議論がなされた。着用に対する理由は、観光客誘致に不利であるとか、欧米では着用義務が廃されているというようなことが並べ

られていたが、本稿執筆時点では最終的方針の正式表明はないままである\*。

一方、マスク着用にはどの国や地域でも相対的には消極的だったヨーロッパのドイツでは秋が深まる10月以降公共機関や施設ではマスク着用が改めて求められるようになっていく。フランスでも同様の措置がとられている。オーストラリアでは、マスクはインフルエンザや新型コロナウイルスの感染を予防する有効な道具であるとして、その着用が推奨されている。

本稿で取り上げている英国や米国ではマスク着用の義務が廃されて以降の動向はまだ不明である。しかし、小さな薄っぺらい布きれでできた衛生用品が、この3年間世界を震撼させてきた感染症拡大抑制に大きな役割を果たしているのは既に明らかで、この事実は世界的に受容されている。今回の新型コロナウイルスの感染状況が収まらない現状では、マスク着用をめぐる議論は今後も続くのは予想に難くないように思われる。

\* 2023年1月、新型コロナの分類変更が5月に予定されていることが発表された。これにともないマスク着用にも変化があると思われる。

## 謝辞

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C）（一般）（令和3年度～令和5年度）[課題番号21K01098: COVID-19という常在リスクのある新しい生活様式の受容と適応に関する研究]（代表：鈴木清史、分担者：吉川肇子 [慶應義塾大学教授]、重松美佳 [国立感染症研究所]、西垣悦代 [関西医科大学]）によって可能となりました。助成に感謝いたします。

## 参考文献・資料

Adams, T. 2020

‘The big picture: spreading the message about the 1918 pandemic’ *The Guardian* (May 3, 2020: <https://www.theguardian.com/artanddesign/2020/may/03/the-big-picture-spreading-the-message-about-the-1918-pandemic>)

The Advertising Standard Authority: ASA 2020年3月13日

Coronavirus COVID-19-Advertising responsibility, CAP News, 13 March 2020 (<https://www.asa.org.uk/news/coronavirus-covid-19-advertising-responsibly.html>)

ARERAdot.10th 2014年12月15日

「体調管理が目的ではない、“伊達マスク”愛用者急増中！」(<https://dot.asahi.com/tenkijp/suppl/2014121600090.html?page=1>)

Barry, J. M. 2020 (British version: First published in the USA, 2004)

*The Great Influenza, The Story of the Deadliest Pandemic in History*, Penguin Random House UK

英国放送協会 (British Broadcasting Corporation: BBC)

2020年1月24日「マスクは有効？ ウィルスの感染拡大を防ぐには」(<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-51232723>)

2020年2月29日「新型コロナウイルスの世界的危険度、最高レベルに引き上げ＝WHO」(<https://www.bbc.com/japanese/51685708>)

2020年3月4日「新型コロナウイルスにマスクや手袋は有効？ BBC番組が解説」(<https://www.bbc.com/japanese/video-51731225>)

2020年3月4日「英国広告協会、「誤解を招く」マスク広告を禁止に」(<https://www.bbc.com/japanese/51731228>)

Brienen, N.C., Timen, A., Wallinga, J., Van Steenbergen, J.E. and Teunis, P.F.M. 2010

- ‘The Effect of Mask Use on the Spread of Influenza During a Pandemic’, *Risk Analysis*, Vol. 30(8):1210-1218, published on line 2010 May 10. DOI: 10.1111/j.1539-6924.2010.01428.x (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC7169241/>)
- Cowling, B J, Zhou, Y, Ip, D.K.M., Leung, G M, and Aiello, A E, 2010  
(Review Article: Face masks to prevent transmission of influenza virus: a systematic review, *Epidemiology and Infection* 2010 Apr;138(4):449-56. doi: 10.1017/S0950268809991658. Epub 2010 Jan 22) (<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/20092668/>)
- Harvard T.H. Chan, School of Public Health 2013,  
NEWS: Face masks recommended to help prevent flu transmission (<https://www.hsph.harvard.edu/news/features/face-masks-flu/>)
- History.com  
‘Mask Slackers’ and ‘Deadly’ Spit: The 1918Flu Campaign to shame People into Following New Rules. (<https://www.history.com/news/1918-pandemic-public-health-campaigns>).
- Holden, S. 2007  
‘Posters:Art and Advertising’, Bond University, <http://works.bepress.com/Stephen=holden/14>
- Howard,J., Huang, A., Li, Z.,Tufekci, Z., Zdimal, V.,van der Westhuizen, HM, von Delft, A.,Price, A., Fridman, L.,Tang, LH,Tang, V., Watson, G.L., Bax,C.E.,Shaikh, R.Questier, F.,Hernandez, D.,Chu, L.F., Ramirez, C.M. and Rimoin, A.W. 2020  
(preprint version1の投稿は2020年4月21日、第4版提出は同年10月20日。Online 掲載2020年11月2日)(<https://www.preprints.org/manuscript/202004.0203/v4>)。  
Face Masks Against COVID-19: An Evidence Review / (PNAS peer reviewed version: An evidence review of face masks against COVID-19, January 11, 2021:118 (4) e2014564118: <https://doi.org/10.1073/pnas.2014564118>)
- Jenner, E A., Jones, F., Fletcher, B C., Miller, L. and Scott, G.M., 2005  
‘Hand hygiene posters: selling the message’, *Journal of Hospital Infection* (2005) 59, 77-82 (<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/15702513/>) DOI: 10.1016/j.jhin.2004.07.002
- Martinho-Corbishley, D. 2020  
‘Covid-19-which countries have made wearing face masks compulsory’, (<https://www.auravision.ai/blog/covid-19-which-countries-have-made-wearing-face-mask-compulsory>)
- Milton, D.K., Fabian, M.P., Cowling, B.J., Grantham, and M. L, McDevitt, J.J. 2013  
‘Influenza Virus Aerosols in Human Exhaled Breath: Particle, Size, Culturability, and Effect of Surgical Masks’, *Plos Pathogens*, (<https://journals.plos.org/plospathogens/article?id=10.1371/journal.ppat.1003205>),  
Published: March 7, 2013, <https://doi.org/10.1371/journal.ppat.1003205>
- O’Guinn, T.C., Allen, C.T., and Semenik, R. J. 1998  
*Advertising*, South-Western College Pub.
- Reuters (by Kelland, K.) 2020年4月4日  
‘Masks do reduce spread of flu and some coronaviruses, study finds’ (<https://jp.reuters.com/article/uk-health-coronavirus-masks-science-idUKKBN21L2I1>)
- Suzuki, Seiji 2022  
‘Compliant or Obedient? New Lifestyle and People in Japan in the Pandemic of Covid-19’, Advance. Preprint(<https://doi.org/10.31124/advance.19350143.v1>)
- The Washington Post* (by Sun, L.H. and McGinley, L.) 2020年3月31日  
Memos from CDC to White House lay out rationale for possible widespread use of face coverings



- (<https://www.washingtonpost.com/health/2020/03/31/coronavirus-masks-cdc/>)
- 池田一夫, 藤谷和正, 灘岡陽子, 神谷信行, 広門雅子, 柳川義勢 2005  
「日本におけるスペインかぜの精密分析」東京都健康安全研究センター『研究年報』(Ann. Rep. Tokyo Metr. Inst.P.H.) 56, 369-374, 2005
- 一般社団法人日本衛生材料工業会  
(<https://www.jhpia.or.jp/product/mask/mask3.html>)
- 奥積雅彦 2020  
「統計報告で見る我が国でのスペイン風邪の被害状況」統計図書館ミニトピックス30 (<https://www.stat.go.jp/library/pdf/minitopics30.pdf>)
- 厚生労働省 平成21年  
新型インフルエンザ及び鳥インフルエンザに関する関係省庁会議「新型インフルエンザ対策ガイドライン」(<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ful/guide/090217keikaku.pdf>)
- 桜井光俊 2012  
『マスクと日本人』秀明出版会
- 島田貴仁、荒井崇史 2017  
「脅威アピールでの被害の記述と受け手の脆弱性が犯罪予防行動に与える影響」『心理学研究』88(3):230-240
- 住田朋久 2021  
「なぜ日本はマスク好き？その意外な歴史的背景140年以上前にすでにファッションアイテム化」宮本由貴子=フロントラインプレス (FrontlinePress) 所属取材記事 (<https://toyokeizai.net/articles/421202>)
- 東京医療用品卸業界 平成7年 岡本鐵夫 編集／記念史編纂委員会  
『東京医療用品卸業界八十年のあゆみ』(非売品) 294-295頁 (<http://www.mask.co.jp/osato/mamechishiki/rekishi01.htm>)
- 豊川行年、榊原士郎 1951  
「ガーゼマスクの飛沫伝染防止に対する効果について」『公衆衛生』第10巻1号：桜井2012：44から援用)
- 内務省衛生局 1922  
「流行性感冒」(<https://www.niph.go.jp/toshokan/koten/Statistics/10008882-p.html>)
- 日本リサーチセンター 2021  
「新型コロナウイルス自主調査：2021年最新のマスク着用率は？～世界23か国・地域調査～」(<https://www.nrc.co.jp/nryg/210210.html>)
- 藤村美月、谷口綾子 2017  
「電車内マナー啓発メッセージがマナー遵守行動意図に与える影響」『土木学会論文集D3(土木計画学)』, Vol.73, No.5(土木計画学研究・論文集第34巻), ([https://doi.org/10.2208/jscejipm.73.I\\_1033](https://doi.org/10.2208/jscejipm.73.I_1033)) ([https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscejipm/73/5/73\\_I\\_1033/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscejipm/73/5/73_I_1033/_pdf/-char/ja))
- 宮武外骨編 1925  
『文明開化2 広告編』「いわしや 松本市左衛門 明治12年2月」：住田 [2021] より引用
- 読売新聞オンライン 2020年10月30日(編集委員 片山一弘)  
「日本人も昔からマスク好きだったわけではない」(<https://www.yomiuri.co.jp/column/chottomae/20201028-OYT8T50038/>)

# Comparisons of Posters to Promote Mask Wearing

Seiji Suzuki, PhD \*

## Abstract

Face masks were devised in the late 19th century as equipment for healthcare professionals. When the 1918 influenza pandemic broke out, several countries tried to introduce the use of masks not only for the medical professionals but also for the general public. But when the pandemic ended, the use of masks in the streets disappeared in the Western countries, while in other countries, such as in Japan people continued to use masks. When the Covid-19 pandemic was declared in 2020, the public authorities in countries where few mask wearers were seen, launched extensive campaigns to enhance awareness of mask wearing. This paper attempts to examine the characteristics of mask wearing promotional posters produced during the influenza pandemic of 1918-19 and the Covid-19 pandemic of 2020 in Japan, the UK and the USA.

\* Visiting Professor, Center of Integrated Research and Education of Natural Disasters, Shizuoka University